

Title	金聖嘆本『水滸伝』の泣き描写と批評
Sub Title	Portrayals of crying and critiques of them in Jin Shengtan's version of Shuihu zhuan
Author	石川, 就彦(Ishikawa, Narihiko)
Publisher	慶應義塾中国文学会
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾中国文学会報 (Bulletin of The Keio Sinological Society). No.4 (2020.) ,p.61- 84
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12810295-20200329-0061

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

金聖嘆本『水滸伝』の泣き描写と批評

石川就彦

- 一 はじめに
- 二 宋江の泣き描写に対する改変
- 三 燕青の泣き描写に対する改変
- 四 その他の人物の泣き描写に対する改変
- 五 おわりに

一 はじめに

梁山泊の首領である宋江は、頻繁に泣く。その泣き虫ぶりは、『三国志演義』の劉備、『西遊記』の三蔵玄奘等とも共通する。宋江に限らず、『水滸伝』で描かれる多くの泣き描写は、人物像の形成に少なからず影響を与えている。特に明末清初に編まれた金聖嘆批評『水滸伝』（以下、「金聖嘆本」、「金本」、「金」と略称）では、泣き描写の人物像への影響を意識した改変や評語が散見される。金聖嘆の改変や批評についての研究は盛んだが^①、金聖嘆が感情表現に施した改変についての論考、或いは長篇白話小説と感情表現について論じたものはさほど多くない^②。更には後述するような、感情表現に対する改変が人物像の形成に与える影響について深く言及した研究も管見の限り見られない。そこで本稿は、金聖嘆本で改変された泣き描写や評語の調査から、金聖嘆本での泣き描写の改変意図や効果、或いはその価

値について考察することを目的とする。

二 宋江の泣き描写に対する改変

金聖嘆が改変した泣き描写のうち、特筆すべきは宋江と燕青に対するものである。本章では宋江、次章では燕青の泣き描写を中心に改変状況を整理し考察する。尚、調査の対象とする語句は泣きを表す動詞のみに限定し、「哭」「泣」「号」「啼」「涙」「涕」「慟」「哽」「咽」の八種とした。⁵⁾

『水滸伝』で最も多く泣くのは宋江である。容本における宋江の泣きは、全百六十回の泣き描写のうち四十四回〔「哭」二十三回、「涙」十九回、「泣」・「涕」各一回〕にも上る。⁶⁾これは全体の二七・五%を占め、他の人物と比べて群を抜く。宋江の泣きの要因を見ると、父に対する「孝」、仲間に対する「義」、国や皇帝に対する「忠」に起因するものが混在している。⁷⁾このように「孝」「義」「忠」に起因する泣きが混在していることは、三つの精神を共に重んじる、宋江自身の複雑な精神構造が表出したものと見てよい。宋江の泣き描写に改変が施されたのは二例あり、そこには金聖嘆の宋江に対する態度が大いに表れている。

(二一) 晁蓋が死に瀕している場面 (金本第五九回)

【容】 宋江等守定在床前啼哭親手敷貼藥餌灌下湯散衆頭領都守在帳前看視

【徳】 宋江等守定在床前啼哭親手敷貼藥餌灌下湯散衆頭領都守在帳前看視

【金】 宋江 守定在床前啼哭「夾批A」 衆頭領都守在帳前看視「夾批B」

(宋江は枕もとに付き添って声をあげて泣くばかりだった。頭領たちもみな病床のそばへ集まり見守った。)

【夾批A】 俗士讀之、便謂宋江好、不知正極寫宋江之詐也。○哭亦何罪、但通長讀之、殊復不堪耳、我生生世世、不願見此等人。

(俗人はこれを読み、宋江は良いと言うが、正に宋江の権詐を書き尽していることを知らない。○泣く

ことに何の罪があるのか。しかしこれを全て読むと、特に聞くに堪えない。私は何度生まれ変わっても、このような人と出会いたくない。

【夾批B】 宋江獨哭、難乎其爲下也、衆人不哭、難乎其爲上也、獨哭、宋江今日之惡也、不哭、宋江平日之惡也。
 (宋江一人が泣くのを、下とするのは難しく、他の頭領たちが泣かないのを、上とするのは難しいが、一人だけ泣くのは、宋江の今日の悪事で、泣かないのは、宋江の平時の悪事である。)

ここで容本・徳本が「宋江等が啼哭した」とするところを、金本は「宋江が啼哭した」と改めている。その上で、晁蓋を看病する描写を削除し、兄弟たちが見守る描写に繋げている。ここに夾批が二つある。夾批A・Bは共に、宋江の「権詐」を批判し、金聖嘆が宋江に批判的態度を取っていることが明確である。また、この回の回初総評に次のような文がある。

二二二 金本第五九回回初総評

通篇皆用深文曲筆、以深明宋江之弑晁蓋。如風吹旗折、呉用獨諫、一也。(略) 守定啼哭、不商療治、五也。(略) (この) 一篇では皆深遠で遠回しな文章が用いられており、それでもつて宋江が晁蓋を殺したことを非常に明らかにしているのである。「それは」例えば風吹き旗折れ、呉用がただ一人諫めた、これが一つ目である。(略) (晁蓋を) 見守って啼哭し、治療の相談をしない、これが五つ目である。(略)

回初総評で金聖嘆は、宋江が晁蓋を殺そうとしていることが分かる場面を十場面列挙し、その五つ目に宋江が臥せる晁蓋の治療をするでもなくただ見守って「啼哭」している点を挙げています。

二二三 安道全によって宋江の病が平癒した直後の場面 (金本第六四回)

【容】 宋江纔得病好便 與呉用 商量要打北京救取盧員外石秀以表忠義之心

【徳】 宋江纔得病好便 與吳用 商量要打北京救取盧員外石秀

【金】 宋江纔得病好便又對衆 灑淚商量要打大名救取盧員外石秀〔夾批〕

(宋江は病気がやつとよくなると、さつそくまたもや一同に向かつて、大名府を攻め、盧の旦那と石秀を救いだそうと涙ながらに相談をもちかけた。)

【夾批】 看他灑淚二字，可謂醜極，仍不爲晁天王報仇灑淚，故惡之也。

(宋江が涙を流すという二字を見ると、極めて見苦しい。相変わらず晁蓋の仇を討つことをせずに涙を流しているのである。故に宋江のことを憎んでいる。)

〈二一三〉では、「呉用に相談した(容本・徳本)を「皆に向かつて涙を流して相談して」と改変している。そこに附せられた夾批には「極めて見苦しい」とあることから、宋江を敢えて兄弟たちの面前で泣かせて醜態を晒させようとしたと分かる。更には、晁蓋の仇討ち前に泣くことに対する批判も見え、この改変からは既存の宋江の人物像を改めようとする強い意図を感じ取ることができる。

宋江の泣き描写の改変は以上の二箇所止まるが、これらだけでも金聖嘆が宋江に批判的態度を取っていることが明白である。

更に、改変されていない泣き描写に附せられた評語からも金聖嘆の宋江の泣きに対する評価が分かる。

〈二一四〉 江州に流される中途、梁山泊入りを固辞して涙を流す宋江〔金本第三五回〕

【金】 説罷淚如雨下便拜倒在地〔夾批〕

(こういうおわると、涙の雨を降らして、その場にどっとひざまずいた。)

【夾批】 極寫宋江權術 何也 忠孝之性 生于心 發於色 誠不可奪 雖用三軍奪一匹夫而不可得也 如之何其至于哭乎 哭者 人生暢遂之情 非此時之所得來也。

(宋江の策略を書き尽している。なんということだ。忠孝の性質は心に生じ、表情に表れる。本当に奪い

取ることとはできない。大軍を使つて一人の匹夫を奪い取ろうとしても奪い取ることとはできない。どうしてこのように宋江は泣くに至つたのか。泣くというのは、人生の中で自然と芽生えてくる感情であり、こういった時に得られるものではないのだ。」

〔二一五〕李逵が母を食べた虎を殺した後、母を埋葬して泣いている場面〔金本第四二回〕

【金】 李逵大哭了一场〔夾批〕

（李逵はひとしきり声をあげて泣いた）

【夾批】 寫得生盡其愛，養盡其勞，葬盡其誠，哭盡其哀，眞正仁人孝子，不與宋江權詐一樣。

（愛情を尽くして生き、労苦を厭わず養い、誠心を持つて葬り、哀れみを抱いて哭す。これこそが眞の仁徳のある孝行者であり、宋江の權詐とは異なる。）

〔二一四〕・〔二一五〕ではいずれも宋江の「權詐」を非難する。特に〔二一五〕では、李逵の泣きを引き合いに出してまでも宋江を批判している。このように金聖嘆の宋江への批判的態度は一貫している。

以上のことから、金聖嘆の宋江の泣き描写に対する改変は全て、宋江の人物像の歪曲と批判を意図したマイナス方向の改変であると言える。

金聖嘆は、明末という白話小説の爛熟期に至つて出現した批評家の代表的な人物の一人である。金聖嘆は宋江の「權詐」を繰り返して非難しているが、泣き描写においても同様の評語を附していることは先に示した通りである。金聖嘆は宋江の泣き描写の中から、宋江の欺瞞性を見出し、それに対して強い反感を覚えたのである。そのため、既に通行していたテキスト⁸⁾に対して感情表現の改変を利用した批評を展開している。これは、明末清初における批判精神や反発精神のような思想面の深化の一側面を示しているとも言える。更には表現技法の深化とも言えよう。このように宋江に激しい非難を浴びせる金聖嘆だが、一方で燕青に対しては好意的な改変を施している。燕青の泣き描写に対する改変については次章で述べる。

三 燕青の泣き描写に対する改変

容本・徳本において、燕青の泣き描写は五場面存在する。そのうち、主人である盧俊義に対する泣きが四場面、徽宗皇帝に対する泣きが一場面存在する。燕青の全ての泣きに共通するのは、燕青自身が「従」の立場であり、「主」の為に泣いている点である。¹⁰⁾つまり、燕青の泣きは全て「忠」の精神に起因した泣きなのである。

金聖嘆が燕青の「忠」に着目していたことは彼の評語に表れている。例えば金本第六〇回の回初総評には「風流者篤其忠貞（風流者は忠貞に篤い）」という一節がある。ここに見える「風流者」とは燕青を指す。¹¹⁾またこの一節からは、金聖嘆が燕青の「忠」を評価していることが窺える。

容本・徳本では、第七一回までに「哭」「涙」共に二回ずつ現れるが、金本では「哭」「涙」共に三回ずつに増加している。泣き描写の改変が施された三場面を以下に示す。尚、一部の評語は省略した。

〈三〉 盧俊義が泰山参りに出掛ける場面（金本第六〇回）

【容】 分付娘子好生看家多便三箇月少只四五十日便回賈氏道丈夫路上小心頻寄書信回來家中知道說罷燕青在面前

拜了 盧俊義分付道小乙在家凡事向前不可出去三瓦兩舍打闕燕青道主人在上小乙不敢偷工夫閑耍主人
如此出行 怎敢怠慢

【徳】 分付娘子好生看家多便三箇月少只四五十日便回賈氏道丈夫路上小心頻寄書信回來 說罷燕青在面前

拜了 盧俊義分付道小乙在家凡事向前不可出去三瓦兩舍打闕燕青道
如此出行小乙怎敢怠慢 主人

【金】 分付娘子好生看家多便三箇月少只四五十日便回賈氏道丈夫路上小心頻寄書信回來 說罷燕青流淚拜

別「夾批」盧俊義分付道小乙在家凡事向前不可出去三瓦兩舍打闕燕青道 主人
如此出行小乙怎敢怠慢

（妻に、「家のことは頼む。長くて三月、早ければ四、五十日で戻ってくる」といませめた。賈氏は、「あな

た、道中はなにとぞお気をつけなさいまし。手紙をせつせとお寄せくださいね」その言葉がおわると、燕青は涙を流して別れの挨拶をした。盧俊義はいいつけて、「おまえは家におつて、すべて切りまわしてくれ。色街へ行つて羽根をのばさないようにな」「燕青は言った、」ご主人が旅立たれるというのに、わたしがどうして怠けたりいたしましょう」(括弧□内は筆者による)

【夾批】 寫娘子昨日流淚，今日不流淚也，却恐不甚明顯，又特地緊接燕青流淚，以形擊之，妙筆妙筆。

(賈氏は昨日涙を流し、今日は涙を流さないが、これはおそらくあまり明確になってはいない。そのためわざわざ続けて燕青に涙を流させて、それでもって賈氏を際立たせているのだ。素晴らしい、素晴らしい。)

〈三二一〉の場面について、燕青が盧俊義に別れの挨拶をするだけの描写が、金本では燕青が涙を流しながら拜している描写へと改められている。その書き換えの意図は直後の夾批から知り得る。夾批にある「寫娘子昨日流淚」は、盧俊義に一日先立って出発した李固(賈氏の姦通相手)を見送りながら賈氏が泣いたことを指す。金聖嘆は燕青を泣かせることで、愛人の李固に対しては泣き、夫の盧俊義に対しては泣かない賈氏の不貞さを浮き彫りにしようとしたが、それが同時に燕青の「忠」を強調することになった。燕青が泣くことで、盧俊義を心配する気持ちが強調されている。

〈三二二〉梁山泊から戻って城内に入ろうとする盧俊義の前に燕青が現れる場面(金本第六一回)

【容】 次日早晨盧俊義離了村店飛遶入城尚有一里多路只見一人頭巾破碎衣裳藍襖看着盧俊義納頭便拜盧俊義擡眼看時却是浪子燕青便問燕青你怎地這般模樣(略)盧俊義大怒喝罵燕青道我家五代在北京住誰不識得量李固有幾顆頭敢做恁般勾當莫不是你做出歹事來今日到來反說我到家中間出虛實必不和你干休燕青痛哭拜倒在地下拖住主人衣服盧俊義一脚踢倒燕青大踏步便入城來

【徳】 次日早晨盧俊義離了村店飛遶入城尚有一里多路只見一人頭巾破碎衣裳藍襖看着盧俊義納頭便拜盧俊義擡眼

【金】

看時却是浪子燕青便問小乙你怎地這般模樣（略）盧俊義大怒喝罵燕青道我家五代在北京住誰不識得量李固有幾顆頭敢做恁般勾當莫不是你做出歹事來今日到來反說我到家中問出虛實必不和你干休燕青痛哭拜倒地地下拖住主人衣服盧俊義一脚踢倒燕青大踏步便入城來

次日早晨盧俊義離了村店飛奔入城尚有一里多路只見一人頭巾破碎衣裳襤褸看着盧俊義伏地便哭盧俊義擡眼看時却是浪子燕青便問小乙你怎地這般模樣（略）盧俊義大怒喝罵燕青道我家五代在北京住誰不識得量李固有幾顆頭敢做恁般勾當莫不是你做出歹事來今日到來反說我到家中問出虛實必不和你干休燕青痛哭爬倒地地下拖住員外衣服盧俊義一脚踢倒燕青大踏步便入城來

（翌朝はやく村の宿屋を出て城内へ急いだが、あと一里ほどのところで破れ頭巾をかぶり身にほろをまとった男が盧俊義を見ると、地べたに平伏して声をあげて泣きだした。盧俊義がよくよく見れば、なんと浪子の燕青ではないか。「おい、どうした、そのさまは」（略）盧俊義はかっとなって、燕青を頭ごなしにののしって、「わしの家は五代にわたり北京に住んできて、知らない者のないほどの家だ。李固が首をいくつももちあわせでもしないことには、そんな真似などできるもんか。きさま、なにか不都合をはたらきおって、先まわりして悪口をいいにきたのだな。家に帰って真相を調べあげ、きさまをそのままにはしておかんど」燕青はおいおい泣いて地面にひれ伏しながら主人の着物にとりすがった。盧俊義は燕青を蹴とばすと、すたすたと城内へ向かった。）

（三二二）の場面では、二箇所の書き換えが行われている。一つ目は、帰路の途中の盧俊義の前に突然燕青が現れた場面で、容本・徳本で「納頭便拜」となっているものを、金本は「伏地便哭」と改めている。主人の盧俊義に平伏するだけでなく、そこに泣きの描写が追加されている。その直後、燕青は盧俊義を説得して引き留めようとするが、盧俊義は取り合わない。それでも燕青は泣きながら必死に訴え、その描写が「拜倒地地下」から「爬倒地地下」に書き換えられている。一つ目の書き換えは、盧俊義の前に現れた真意を告げる前に既に感極まっている燕青の、盧俊義を思う強さを表現している。二つ目は泣き描写に付随する表現の改変ではあるが、「拜」から「爬」に換えることによって、

燕青が地面に這い蹲っている情景が浮かび、主人を救う為に必死になっている印象を受ける。この二箇所の書き換えは、〈三一一〉と同様、いずれも燕青の盧俊義に対する「忠」を強調する効果を生む。

〔三一一〕投獄された盧俊義に差し入れをしたいと、燕青が牢番の蔡福に哀願する場面（金本第六一回）

〔容〕

蔡福起身出離牢門來只見司前墻下轉過一箇人來手裏提着飯罐面帶憂容

蔡福認的是浪子燕青蔡福問

道燕小乙哥你做甚麼燕青跪在地下擎着兩行珠淚告道級節哥哥可憐見小人的主人盧員外吃屈官司又無送飯的錢財小人城外叫化得這半罐子飯權與主人充饑節級哥哥怎地做箇方便是重生父母再長爺娘說罷淚如雨

下拜倒在地

〔德〕

蔡福起身出離牢門來只見司前墻下轉過一箇人來手裏提着飯罐面帶憂容

蔡福認的是浪子燕青蔡福問

道燕小乙哥你做甚麼燕青跪在地下擎着兩行眼淚告道級節哥哥可憐見小人的主人盧員外喫屈官司又無送飯的錢財小人城外叫化得這半罐子飯權與主人充饑節級哥哥怎地做箇方便

下拜倒在地

說罷淚如雨

〔金〕

蔡福起身出離牢門來只見司前墻下轉過一箇人來手裏提着飯罐滿面掛淚〔夾批〕蔡福認得是浪子燕青蔡福問道燕小乙哥你做甚麼燕青跪在地下眼淚如拋珠撒豆告道級節哥哥可憐見小人的主人盧員外喫屈官司又無送飯的錢財小人城外叫化得這半罐子飯權與主人充饑節級哥哥怎地做箇方便

說不了氣早咽

住爬倒在地

（蔡福が立ちあがって牢門を出ると、そこへ役所の塀の陰からひとりの男があらわれた。飯の入れものをさげ、顔じゅう涙でいっぱいである。蔡福は浪子の燕青だと知り、尋ねた。「燕の哥、なにをしているのだね」燕青は地面にひざまずき、涙をぼろぼろこぼしながら訴えた。「牢屋のお頭、お慈悲をおかけくださいまし。わたしの主人の盧の旦那は無実の罪で苦しんでおいでになります、差入れのお金もないありさまでございます。わたしが城外で乞食をして手に入れました入れものに半分の飯を、主人に一時しのぎに食べさせたいと思います。牢番のお頭、なにとぞ便宜をおはからいのほどを……」しまいまでいいおわら

ないうちに、嗚咽にむせんで、地面に平伏した。)

【夾批】 只四字、活畫出屈原申生豫讓等一輩人。

(ただこの四字が、屈原・申生・予讓等の「ような忠心の篤い」姿を活写している。)

〈三一二〉の場面では、泣き描写及びそれに連なる表現において三箇所書き換えが施されている。一つ目は、蔡福が燕青と顔を合わせた際の燕青の描写で、容本・徳本では「面帶憂容」とあるが、金本では「滿面掛淚」と改められている。蔡福に出会う前から主人への思いが涙として溢れ出る燕青の様子を描くことで、燕青の胸の内の苦しさがより強調される。この四字に附せられた評語には屈原・申生・予讓の名が見えることから、燕青をこれら三者に擬えるほど、金聖嘆は燕青の「忠」に注目していたことが分かる。

二つ目は燕青が蔡福に懇願する際の泣き姿の描写である。容本の「擎着兩行珠淚」は、徳本では「擎着兩行眼淚」に、金本では「眼淚如拋珠撒豆」に書き換えられており、金本のみ明らかに表現方法が異なる。金本のこの比喩を用いた泣きの表現は容本・徳本には一度も見られない。

三つ目の改変箇所は、容本・徳本「說罷淚如雨下拜倒在地」から金本「說不了氣早咽住爬倒在地」と書き換えられている。このように金本の燕青は、蔡福に懇願しながら感情の高ぶりを抑え切れずに地面に倒れ込んでしまう。言葉を言い終えずに倒れ込む描写からは、盧俊義を心配する燕青の思いの強さが感じられ、臨場感が増す。また、「拜倒」から「爬倒」への書き換えも施され、その効果は〈三一二〉と共通する。容本・徳本に比べて、金本では燕青の真情の表現を追求した描写がなされていると言える。

以上のように、金聖嘆は燕青の盧俊義に対する「忠」の強調を意図して、泣き描写を故意に増加させたと推察される。

四 その他の人物の泣き描写に対する改変

ここまででは宋江と燕青の泣き描写に対する改変について述べてきたが、他にも泣き描写の改変が行われた人物は存在する。武松三箇所、張順一箇所、李逵一箇所、索超・楊志一箇所の計六箇所で泣き描写の追加が施された。この六場面を以下に示す。

〔四一〕 武松が武大の霊前で潘金蓮を殺そうとする場面〔金本第二五回〕

〔容〕 武松 道哥哥靈魂不遠兄弟武二與你報仇雪恨

〔徳〕 武松 道哥哥靈魂不遠兄弟武二與你報讐雪恨

〔金〕 灑淚道哥哥靈魂不遠今日兄弟與你報讐雪恨

〔男泣きに泣きながら、「兄さん、そこらで見ておくんなさい。今日は弟のおれが、恨みを晴らしてあげますぞ）

〔四二〕 武松が武大の霊前に西門慶と潘金蓮の頭を捧げる場面〔金本第二五回〕

〔容〕 將兩顆人頭供養在靈前把那碗冷酒澆奠了

日就行燒化

〔徳〕 將兩顆人頭供養在靈前把那碗冷酒澆奠了

日就行燒化

〔金〕 將兩顆人頭供養在靈前把那碗冷酒澆奠了又灑淚說道哥哥靈魂不遠早生天界兄弟與你報讐殺了姦夫和淫婦今日就行燒化

（ふたつの首を霊前に供え、ひと碗の冷酒を注ぎながら、涙を流していった。「そこら辺で迷っている兄さん、早く成仏しておくれ。弟のおれが仇を討って姦夫淫婦を殺してやりましたぞ。今日すぐに供養をして

成仏させてあげますぜ」)

〔四一三〕武松が張青・孫二娘と別れる場面〔金本第二七回〕

【容】張青和孫二娘送出門前武松

作別了自和公人 投孟州來

【德】張青和孫二娘送出□□武松

作別了自和公人 投孟州來

【金】張青和孫二娘送出門前武松忽然感激〔夾批〕只得灑淚 別了 取路投孟州來

〔張青と孫二娘は門口に立つて見送った。武松はふとこみあげてくるものがあり、涙ながらに別れの挨拶をし、孟州への道をたどるのだった。〕

【夾批】上東京時、嫂嫂不送出門前、還有哥哥送出門前也。到得配孟州時、已并無哥哥送出門前。天下爲兄弟者、

不止一人、亦有如是之怨毒者乎。今忽然於路旁萍水之張青夫婦、反生受其雙雙送出門前。親兄武大、靈魂不遠、今竟何在哉。忽然感激、灑出淚來、武二天人、故感激灑淚也。○反映前文、至於如此、真正才子、萬世不能易也。

〔東京に向かう時、潘金蓮は見送りをしなかったが、武大は見送った。孟州に配属される時には、武大が見送りをすることはもう決してなかった。天下の兄弟というものには、武松一人に限らず、同じくこのように恨みを持っている者はいるのだろうか。今突然に道端で偶然出会った張青夫婦は、かえってわざわざ二人とも見送った。血の繋がった兄である武大は、靈魂は遠く離れてはいないが、今は一体どこにいるのだろうか。にわか感激し、涙が出てくる。武松は有道の人であるため、感激して涙を流したのである。○前文を反映させ、このようになった。真の才子というものは、万世変わりようのないものなのである。〕

〔四一〕・〔四二〕は共に武松が兄武大の霊前に跪く場面である。兄の霊前で武松が泣く描写が加わることで、武松の兄に対する「悌」の篤さが強調される。これは兄を失った悲しみ、仇に対する恨み、仇討ちを果たした嬉しさが

入り混じった涙である。(四一三)は、武松が世話になった張青・孫二娘夫妻と別れる場面である。ここに「忽然感激只得灑淚」が加えられている。また、ここに附せられた評語からは、武松を見送らなかつた潘金蓮、もう見送ることができない武大と、出会つたばかりであるにも拘らず見送りをした張青夫妻の違いに着目していることが分かる。この場面に泣き描写を加えることで、容本・徳本では描かれない武松の内面に渦巻く恨めしさを表面化させている。また、この場面で武松と張青夫妻の間の「義」の精神も強調されている。

〔四一四〕張順が刑場から逃げ出した宋江・戴宗らと再会した場面〔金本第三九回〕

〔容〕張順見了宋江喜從天降衆人便拜道

〔徳〕張順見了宋江喜從天降 便拜道

〔金〕張順見了宋江喜從天降 哭拜道〔夾批〕

(張順は宋江に会つて、もう天にも昇る心地である。涙ながらに挨拶をして)

〔夾批〕喜從天降四字下、却接哭拜二字、直寫出豪傑朋友神理來。俗筆如何能有一字。○真正大喜、未有不哭者、

俗子安得知之、才子則知之耳。

〔喜從天降〕の四字の下に、「哭拜」の二字を繋げることによって、豪傑朋友の奥深い道理を直接に描き出している。俗筆ではどうしてこの一字を書けるだろうか。○本当に大喜びして、泣かなかつた者は今までいなかつたというのを、俗人はどうして知り得るだろうか。才子こそがこのことを知っているのである。)

この夾批には、金聖嘆は喜びの感情によって涙を流すことは才子こそが知っていることとある。喜びの描写に更に泣き描写を加えることで張順の心の動きをより繊細に描こうという金聖嘆の姿勢が窺える。また、この改変により張順の宋江に対する「義」の精神が強調される。

〔四一五〕李逵が、母を食べた虎を殺し、偽の李逵（李鬼）を殺したことを兄弟に話す場面（金本第四三回）

〔容〕 訴説

衆人大笑晁宋二人 笑

〔徳〕 訴説

衆人大笑晁宋二人 笑

〔金〕

訴説假李逵剪徑一事衆人大笑又訴説殺虎一事爲取娘至沂嶺被虎喫了
説罷流下淚來 宋江 大笑「夾批」道被你殺了四箇猛虎今日山寨裏卻添得兩箇活虎 正宜作慶

正宜作慶

（そこで、にせ李逵の追剥の一件を物語ると、一同はどっと笑った。さらに虎退治の話をして、母をつれて沂嶺まできたところ虎に食い殺されてしまったと語り、涙を流した。宋江が今度はおおいに笑いながら、「あんたに虎が四頭殺されて、今日はこの山寨に生きた虎（青眼虎と笑面虎）が二頭ふえたという勘定だな。まことにめでたいこつた」）

〔夾批〕

大書宋江大笑者、可知衆人不笑也。夫娘何人也。虎喫何事也。娘被虎喫、其子流淚、何情也。聞斯言也、

不必賢者而後哀之、行道之人莫不哀之矣。江獨何心、不惟不能哀之、且復笑之。不惟笑之而已、且大笑之耶。天下之人莫非子也、天下莫非人子、則莫不各有其娘也。江而獨非人子則已、江而猶為人子、則豈有聞人之娘已被虎喫、而爲人之子乃復大笑。江誰欺、欺太公平。作者特於前幅大書宋江不許取娘、於後幅大書宋江聞虎喫娘大笑、所以深明談忠談孝之人、其胸中全無心肝、爲稗史之儔也。

（宋江が大笑いしているのを大いに描くことで、皆が笑っていないことが分かるだろう。そもそも母とは誰だ。虎が食べたとはどういうことだ。母が虎に食べられ、その息子は涙を流したというの、どういう感情なのか。この言葉を聞いて、必ずしも賢者が後にこれを悲しむとは限らないが、道行く人がこれを哀しまないことはない。ただ宋江だけは何を思っているのだろうか。これを悲しむことができなだけでなく、更にこれを笑っている。ただ笑っているだけではなく、大笑いしているではないか。天下の人に子でない者はいない。天下に人の子でない者はいないとは、つまりそれぞれに母がない者はいな

いということだ。もしも宋江ひとり人が子でないのであれば仕方ないが、もし宋江が人の子であるというならば、人の母が虎に食べられてしまったことを聞いて、その人の子のためになんと大笑いするところがどうしてあろうか。宋江は誰を欺いているのだろうか。太公を欺いているのだろうか。作者はわざわざ先に宋江が李達の母を迎えに行くのを許さないということを描き、後に宋江が李達の母が虎に食べられたことを聞いて大笑いしているのを描く。そのため忠や孝を深く語る人は、その胸中には全く心と
 いうものがなく、小説における悪者である。

これは李達が母の死の経緯等について話をする場面である。容本・徳本では李達の感情描写は描かれない。母が虎に食べられた場面で李達は涙を流す（金本第四二回）にも拘らず、ここでは涙を流さないのである。元々李達が宋江に対して涙を流して母を迎えに行きたいと訴えたことも踏まえ、金聖嘆はここに泣き描写を加えたと考えられるが、更にその改変には別の意図があったことが、直後の「宋江大笑」に附せられた夾批から分かる。李鬼を殺したこと話して皆が笑ったという記述を前に移置し、李達の涙を加筆した直後に宋江の大笑を描く。それによって宋江の非道さが強調される。ここで着目すべきは、笑いの動作主から晁蓋が除かれている点である。更に「笑」から「大笑」に改めることで宋江の非道さが一層鮮明になる。本稿では泣き描写を論じているが、この点からも笑い描写に対する改変も論ずべき点が多くあると考えられる。

〔四一六〕 索超が梁山泊入りする場面（金本第六四回）

〔容〕 蓋爲朝廷不明縦容濫官當道汚吏專權酷害良民都情愿 協力宋江 替天行道若是將軍不棄同以忠義爲主
 索超本是天罡星之數自然驕合降了

〔徳〕 蓋爲朝廷不明縦容濫官當道汚吏專權酷害良民都情願 協助宋江 替天行道若是將軍不棄同以忠義爲主楊
 志向前另敘一禮又細勸了一番索超本是天罡星之數自然驕合降了

〔金〕 你看我衆兄弟們一大半都是朝廷軍官若是將軍不棄願求協助宋江一同替天行道 楊

志向前另自叙禮訴別後相念兩人執手灑淚事已到此不得不服

(「ご覧ください。われわれの仲間は、もとをただせば朝廷の軍官だった者がほとんどです。もし將軍さえよろしければ、わたしに力をお貸しになり、いっしょに天に替わって道を行っていただきたいのですが」とすすめた。楊志も進みでてて挨拶をすると、一別以来どんなになつかしく思っていたかを訴え、ふたりは手を取りあつて涙を流した。このようなところまでことが進んでしまつては、従わないわけにはいかなかった。)

(四一六)は索超が梁山泊軍に捕らえられ、仲間入りの説得を受ける場面である。ここで楊志が登場するのは、楊志と索超が以前北京大名府で一騎打ちの試合をした因縁があるからである。索超と誼みのある楊志を登場させることで索超を入山させようとするが、金本では両者の親しさがより強調されて描かれる。二人は手を取り合つて涙を流している。容本・徳本では索超は天罡星の一人であるために自然と入山したとするが、金本の索超は楊志との友情(「義」)のために入山を決める。金聖嘆は索超の入山に繋がる伏線(索超と楊志の一騎打ち)を回収し、入山の必然性を索超の感情面から裏付けようとしたと言える。

以上のように、宋江の泣き描写に対する改変は宋江を批判することを目的としたマイナス方向の改変であつたが、燕青を筆頭とした宋江以外の人物の泣き描写の改変は全て、肉親・仲間への思いの強さを強調しようというプラス方向の改変であると見受けられる。

金聖嘆の改変は様々な意図によるが、その中には物語展開を矛盾なく自然なものにする意図、或いは登場人物の言動に臨場感を持たせる意図がある。北村氏論文¹⁶や熊谷氏論文¹⁷等でも、金聖嘆が改変によつて臨場感や現実味を追求したことが触れられている。また田中智行氏は、金聖嘆が作者(施耐庵)について、自らを消し、ただただ「筆性」に従つて文を書き、自他の区別を取り払つてその人物と「共鳴」することによつて描き分けている点を評価していると述べる¹⁸。このように、作者自らが登場人物に憑依して綴つたという金本において金聖嘆は、その言動一つ一つに作者の考えるその人物なりの心情的根柢があると考え、それをより表面化させるために改変を施したのだろう。このような

感情的・心情的裏付けは、人物の言動の無矛盾性を担保し、一貫性を補強し、同時に臨場感を増す。

〔二一五〕や〔四一五〕に見られるような、宋江と李逵とを並べ立てる点について、金聖嘆は「読第五才子書法」(以下、「読法」)で自ら言及している。金本には序文の後に「読法」が置かれ、そこには『水滸伝』の「読み方」が述べられている。「読法」には次のような一段がある。

〔四一七〕「読第五才子書法」

只如寫李逵，豈不段段都是妙絕文字，却不知正爲段段都在宋江事後，故便妙不可言。蓋作者只是痛恨宋江奸詐，故處處緊接出一段李逵朴誠來，做箇形擊。其意思自在顯宋江之惡，却不料反成李逵之妙也。(略)

(李逵の描写は、なんと一段一段の全てが素晴らしい文章ではないか。一段一段の全てが宋江の話の後に置かれているため、その素晴らしさは言葉にできない。思うに作者(施耐庵)はただひどく宋江の権詐を憎んでいるので、あちこちで素朴で誠実な李逵の話とくつつけて、「宋江の権詐を」浮き彫りにしているのである。その意図は思い通りに宋江の悪を明らかにすることにあつたが、かえって凶らずも李逵の素晴らしさを引き立てている。(略))

〔四一五〕では、母の死に涙を流す李逵を描く一方、その直後に大笑いする宋江を描写する。その意図については先に述べた通りであるが、李逵の「孝」・純真さを称揚し、宋江の非道さを露呈させることを目指した改変であろう。「読法」のこの一段から、本来の意図は宋江を貶めることにあり、李逵に対する称揚はそれに付随して起こったものであることが分かる。〔二一五〕の評語に宋江を登場させるのも、同様の意図によるものであろう。

また、「読法」には梁山泊の好漢に対する評価が綴られている。その評価は「上上」「上中」「中上」「中下」「下下」の五段階で表される。泣き描写に改変が施された七人の好漢について見ると、「下下」と最低評価を下された宋江を除き、武松・李逵・楊志が「上上」、索超が「上中」、燕青・張順が「中上」という高評価がなされている。つまり、マインス方向の改変がなされた宋江には最低評価を、プラス方向の改変を施したその他の六人には高評価を与えているのである。この点から考えると、金聖嘆の人物評価と泣き描写の改変に相関性があることは十分に考えられる。小松

氏は次のように述べる。

魯智深・李逵の純粹さはより純粹な方向へ、宋江の偽善性はより偽善的な方向へと深化される。そしてそれは、あくまで「讀法」において金聖歎が提示した方向への深化なのである。(略) 宋江の描写の書き換えは、深化というより歪曲と呼ぶべきものである。これは、反乱者の否定という金聖歎が主張するもう一つの方向性が入り込んだ結果である。¹⁹⁾

このように小松氏は、人物像の改変(深化及び歪曲)を意図した金聖歎の本文改変は、その前提としてその人物への評価があると述べる。この点は本稿の調査により、泣き描写の改変においても裏付けることができる。明らかになった。人物評価と泣き描写改変との関係が、宋江には「権詐」の強調、燕青には「忠」の精神の強調という形で顕著に表れているのである。²⁰⁾

以上のように、ここまで金本の泣き描写の改変状況とその効果や意図を論じてきたが、これらの考察にはテキスト異同以上のものを考える必要性がある。「泣き」の行為は心情の動きと切り離して考えることはできない。胸の内に湧き上がる思いが「泣き」を引き起こすのである。その「泣き」は、言葉で表し得ない複雑な思いの代弁や、言葉とは裏腹の真情を秘めているがために表出したものかもしれない。ともあれ、このテキスト異同はただ単なる言語的異同を超えた、その前後の一連の描写も含めた一種の身体イメージの改変として捉えるべきであろう。例えば(三二二)の三つ目の改変がそれである。泣き描写或いは泣き描写に付随する表現の改変によって、読者がその人物の様子を金聖歎のイメージする姿とより近い形で想像できるよう誘導するのである。このように、身体表現として「泣き」を捉えることは金聖歎が臨場感のある描写を追求する上で不可欠である。これは他の感情表現にも言えるだろう。身体イメージとしての感情表現の改変により、読者がその場面をはっきりとイメージできるようにすると、その描写に対する共感或いは反感の感情が生じやすくなる。例えば(四一五)では、宋江を泣かせるのではなく、別の感情表現(ここでは「笑い」であり、「笑い」も身体表現の一種である)を用いた。この場面で読者は、宋江に対して違和感や嫌悪

感を覚えただろう。金聖嘆は感情表現の改変によって人物像も改変したが、彼は読者のその人物に対する好悪感情への影響をも意識していただろう。臨場感の獲得は、同時に読者からのより鮮明な共感・反感の獲得をもたらすのである。

五 おわりに

本稿では金聖嘆本の泣き描写の改変と、その意図や効果の考察を行った。その結果、宋江の泣き描写には宋江の「権詐」を強調するマイナス方向の改変が、燕青の泣き描写には燕青の「忠」を強調するプラス方向の改変が施されていることが分かった。この両者のベクトルの違いは、金聖嘆の人物評価に起因していると考えられる。このように金聖嘆は泣き描写の改変により、自身の価値観を大いに表現した。そこからは、言語を超えた身体イメージとしての感情表現による、臨場感の獲得への効果も認められる。

本稿では触れられなかったが、同時代の別の長篇白話小説に目を移すと、泣き描写に対する改変は様々な様相を呈している。明末清初の長篇白話小説批評と言えば、毛宗崗批評『三国志演義』²¹⁾「毛宗崗本」や、張竹坡批評『金瓶梅』²²⁾「第一奇書本」等が挙げられる。更には『西遊記』や『封神演義』等と並べて論じることでもできよう。これらの各版本における感情描写の改変状況を調査することができれば、感情描写の改変を利用した金聖嘆の批評手法が他の批評家に影響を与えた可能性や、その上での金聖嘆及び金本の位置付けも可能であろう。そのためには泣き描写に限らず、他の感情描写の改変状況についても調査する必要がある。これらの調査については稿を改めることとする。

注

- (1) 本稿で言う「評語」は、眉批、夾批、回初総評、割注及び、「序一」「序二」「序三」「宋史綱」「宋史目」「読第五才子書法」「施耐庵自序」を指す。

- (2) 張国光『《水滸》与金聖嘆研究』(中州書画社、一九八一年)、中鉢雅量『中国小説史研究——水滸伝を中心として——』(汲古書院、一九九六年)、小松謙「金聖歎『水滸傳』考」(『和漢語文研究』、第一四号、一一一四頁、二〇一六年十一月)等。
- (3) 『水滸伝』の「泣き」を論じた研究には、汪遠平「《水滸》的哭態描写」(『吉林大学社会科学学报』、一九八五年第一期、五一—五七頁)があるが、これは版本を跨いだ検証は行っていない。『三国志演義』における「泣き」を論じたものは、吉永壮介「『三国志演義』の涙の力学」(『藝文研究』、第一〇五号第一分冊、二二—四〇頁、二〇一三年十二月)が最も詳しく、井波律子「中国の五大小説(下)」(岩波新書、二〇〇九年)、金文京『三国志演義の世界【増補版】』(東方書店、二〇一〇年)等でも言及されている。
- (4) 金聖嘆本との校勘には、「容与堂本」(百回本。以下、「容本」、「容」と略称)と「徳山毛利本」(百二十回本。以下、「徳本」、「徳」と略称)を用い、以下のテキストを使用した。【金聖嘆本】…『第五才子書施耐庵水滸傳』(全八冊、中華書局、一九七五年)。【容与堂本】…『明容與堂刻水滸傳』(全四冊、上海人民出版社、一九七五年)。【徳山毛利本】…『宮内庁書陵部所蔵本を筆者が複写したものを使用。尚、本稿で示す本文訳は金本を底本とする佐藤一郎訳『世界文学全集水滸伝』(七十回本、全二冊、集英社、一九七九年)に基づき、評語訳は拙訳による。その他に井波律子訳『水滸伝』(百回本、全五冊、講談社学術文庫、二〇一七年)、駒田信二訳『水滸伝』(百二十回本、全八冊、講談社学術文庫、一九九一年)を適宜参照した。金聖嘆本の底本は百二十回本であるが、本稿では金聖嘆が泣き描写に対して施した改変の状況をより正確に把握するため、文繁本中最古の完本である容本も用いた。
- (5) 嘆き表現や比喻表現等、検証対象の選定には議論の余地があるが、本稿では「泣くこと」を表す動詞のみを対象とした。
- (6) 泣き描写の出現回数を数える際、回名や会話文中、詩詞中の泣きを表す語、動物の鳴き描写は除いた。更に、一度の泣き描写の中に何度も同じ字が用いられる場合は一回として数えた。設定した基準によっては異なる結果が出ると思われる。
- (7) 『水滸伝』における「忠」「義」及び「忠義」の定義については笠井直美「隠蔽されたもう一つの「忠義」——『水滸傳』の「忠義」をめぐる論議に關する一視点——」(『日本中国学会報』、第四四集、一七二—一八六頁、一九九二年十月)、荒木達雄「『水滸伝』に見える「義」の解釈」(『東京大学中国語中国文学研究室紀要』、第一三三号、二二—四八頁、二〇一〇年十一月)等の論考がある。笠井氏は『水滸伝』の「忠義」とは損得や結果、自身の犠牲を考慮せず、他人のために力を尽くすことであり、その対象は本来限定されないとした。その対象は大まかに「朝廷」「仲間・義兄弟」「一般人・弱者」の三種に分けられ、その三者に対して本文では同様に「忠義」という語を用いていると氏は指摘する。このように本来は「忠」「義」「忠義」といった概念は様々な性質を持ち、一義的な定義付けはできないが、本稿では便宜的に「朝廷や主人に対す

る忠誠」を「忠」、「仲間や義兄弟に対する誠実さ」を「義」と称することとする。

- (8) 本稿で扱う版本は全てテキストの詳細な「文纂本」であるが、明代当時、文纂本を簡略化した「文簡本」も広く通行した。筆者の調査によると、文簡本（調査には「評林本」・「劉興我本」・「二刻英雄譜」を使用）には文纂本（容本）には見られない泣き描写が多く見られた。その中でも宋江の泣き描写の追加が最も多い点は注目に値する。元々最も頻繁に泣く宋江の人物像が文簡本では更に強調されているのであるが、この追加が宋江に対する褒貶のいずれの意図を持ったものなのかは検討が必要である。

- (9) 注3吉永氏前掲論文によると、毛宗崗批評『三国志演義』（以下、「毛宗崗本」）に見られる泣き描写の改変には、毛宗崗自身が考える「正統性」が大いに表現されているという。献帝から劉備へと続く「正統性」を認められたグループでは、「哭」が「泣」に改められている。一方で、「正統性」を認められなかったグループでは、例えば孫権の泣き描写が「哭」に改められ、劉禪の「泣」が削除されており、「泣」くことが許されなかった。以上のことから吉永氏は、毛宗崗本での泣き描写の改変に毛宗崗の考える「正統性」が顕著に表れている点、そして「泣」を「正統性」・「優位性」の高いものとして意識的な字句の書き分けが行われている点を指摘する。これらからは、毛宗崗の、先行する通行本への批判精神を読み取ることができる。通行本に反発心を抱き、感情描写を利用して自らの思想を表現した点で、明末清初の長篇白話小説批評には同じ傾向があったと考えることができよう。

- (10) 燕青の徽宗皇帝に対する泣きについて、注3汪氏前掲論文で「這哭、説是為梁山弟兄是可以的、但不如説是為宋江、為盧俊義——為、拡大」了的主子（この泣きは、梁山泊の兄弟のためであるとも言えるが、宋江や盧俊義のため——「拡大」した主人のためであると言った方がよい）」という指摘がある（五四頁）。汪氏の指摘に基づけば、この場面での泣きは「主」である宋江や盧俊義の為のものであるという解釈もできる。ただし、この場面が出現するのは第八一回（容本・徳本）であるため、金本では切り落とされている。

- (11) 燕青の綽名「浪子」の解釈については様々な研究がある。例えば宋子俊「元雜劇中宋江和燕青形象考述」（『甘肅社会科
学』、二〇〇〇年第二期、六四—六七頁）では、いくつも例を挙げて「浪子」とは「風流」と解釈すべきだとする。

- (12) 金本に見られる比喩表現を用いた幾つかの改変のうち、宋江が晁蓋の霊を夢に見た場面（金本第六四回）を例に挙げる。

【徳】

宋江好生憂悶當夜

帳中伏枕而臥忽然陰風颭颭寒氣逼人

宋江擡頭看時只見天

王晁蓋欲進不進叫聲

【金】

宋江悶悶不樂是夜獨坐帳中

忽然一陣冷風刮得燈光如豆風過處燈影下閃閃走出一人宋江擡頭看時却是天

王冕蓋欲進不進叫聲

（宋江は心がふさいで仕方がなかつた。その夜、ひとり寢床のなかでうとうととしてしていると、にわかに一陣の冷風が吹いてきて、燈光はあたかも豆粒のように細くなった。風が吹きぬけると、火影からひらりひらりとひとりの男があらわれた。宋江、頭をもたげて見ると、それは天王の冕蓋で、近づこうとしながら近づかず（に）声をかけた。）

金本の比喩表現に関する論考は管見の限り見られない。金聖嘆が意識的に比喩表現を用いたか否か等について検討の余地はあるが、金本全篇に亘る検証を必要とするため、本稿ではこれ以上論じない。

- (13) 北村真由美氏は『水滸傳』の文体——「金聖嘆本」の讀法をめぐって——（『中國文學研究』、第二七期、一二〇—一三三頁、二〇〇一年十二月）、一二六—一二八頁で、金本の会話場面における改変は臨場感溢れる表現を目指したものであると指摘する。

- (14) 熊谷祐子「第六才子書西廂記（金聖嘆本西廂記）の特質——その「案頭書」化について——」（『集刊東洋学』、第四六号、二九—四三頁、一九八一年十月）において、金聖嘆は『西廂記』を改変する際、ストーリー展開をスムーズにするために現実味を付加しようとした点が指摘されている。

- (15) 白話小説の「笑い」の研究には、汪遠平「百種情懷百般笑——《水滸》的笑態描写」（『遼寧大學學報』、一九八四年第六期、五二—七五頁）、吉永杜介「『三国志演義』の「笑い」の位相について」（『藝文研究』、第一〇四号、三七—五四頁、二〇一三年六月）等がある。

- (16) 注13北村氏前掲論文参照。

- (17) 注14熊谷氏前掲論文参照。

- (18) 田中智行「『金瓶梅』張竹坡批評の態度——金聖歎の繼承と展開——」（『東方学』、第一二五輯、七二—八九頁、二〇一三年一月）、七七頁参照。

- (19) 注2小松氏前掲論文、一四頁参照。

- (20) 注2小松氏前掲論文、一三頁には「第五十八回後半以降、第六十四回までは、それほど必然性があるとは思えない改変が全体にわたって加えられ、ほとんど全面的な書き直しといっても過言ではないような状況が現出するのである。」との指摘があるが、金聖嘆の燕青に対する改変については言及していない。

- (21) 詳しくは注9を参照のこと。毛宗崗が自身の価値観や主張を泣き描写を通じて表現した点は金聖嘆と通じるものがある。

(22) しかし一方で毛宗崗本の改変のように、泣きを表す字句に特定の意味を持たせて書き分ける手法は金本では見られない。この点において、改変を利用した毛宗崗の批評手法は特徴的なものであると言えよう。

『金瓶梅』の「詞話本」・「崇禎本」・「第一奇書本」各版本の泣き描写を比較すると、作者の価値観が強く表出された金本や毛宗崗本ほどとは言えないまでも、泣き描写の効果に着目した改変や評語が存在することが分かった。例えば、崇禎本は第八五回の回名を改変している。

【詞話本】

月娘識破金蓮奸情

薛嫂月夜賣春梅

【崇禎本・第一奇書本】

呉月娘識破姦情

春梅姐不垂別淚

崇禎本の作者は、薛嫂に売られる龐春梅が潘金蓮等との別れに際して涙を流さなかったことに注目し、読者に龐春梅が涙を流さないことを印象付けようとしたのであろう。また、ここでの龐春梅の涙の有無について、第一奇書本の第八五回初総評で次のように述べられている。

夫寫春梅，原為炎涼翻案，故用特寫其不垂別淚，以為雪中人放聲一哭也。一部炎涼大書，而有一不垂別淚之人，宜乎為炎涼之翻案者也。故后文極力寫其盈滿，總為作者有不肯垂下之泪鬱結胸中故耳。

（そもそも春梅を描くのは、もとは世情を覆すことであり、そのため彼女が涙を流さなかったとわざわざ書いたのであって、これがもし雪の中で查培繼に救われた呉六奇であれば声をあげて泣くだろうと思う。この一冊の世情の大書には、別れの涙を流さない人がいるのだから、世情を覆すことになるのも当然である。故に後半はそれが充滿するよう力の限り描いたのであり、総じて作者がここで涙を流させずに胸の内を鬱結させている理由なのである。）

龐春梅を「世情を覆す」人物として描く手段として「涙を流させない」描写を行ったとする張竹坡の評語は、泣き描写の人物像形成への影響が意識されている点で金聖嘆と共通する。更には、後の第八九回で呉月娘と再会した龐春梅が涙を流した場面に「不垂別泪，此時反欲垂泪矣。（潘金蓮との別れの際は）別れの涙を流さなかったが、（呉月娘と再会した）ここでは反対に涙を流しそうになっている。」との評語が加えられていることは、張竹坡が龐春梅の涙に着目していた証左となる。以上のように、『金瓶梅』においても泣き描写はある程度効果を認められていたと言えよう。

(23) 金聖嘆と毛宗崗、張竹坡との比較研究は、郝朝陽「情節与 閑筆——毛宗崗、金聖嘆小説結構觀念比較」（鄭州大学

学報（社会科学版）、第三三卷第五期、八七—八九頁、二〇〇〇年九月）、鄧雷／許勇強「金聖嘆与張竹坡評点比較研究——以《水滸伝》《金瓶梅》重疊部分為例」（『樂山師範学院学報』、第二八卷第四期、一四—一七・二五頁、二〇一三年四月）、注18田中氏前掲論文等がある。